同志社墓地のご案内

学校法人　同志社

若王子山頂

新島襄は生前、永眠の地をひそかに、東山山麓の南禅寺墓地に定めていたと思われる。南禅寺山門の南側にある塔頭天授庵に、明治20（1887）年１月30日に亡くなった父民治が葬られていたからである。

天授庵には、明治維新のとき戦没した肥後藩士や、肥後藩の出身で維新の理論的指導者の一人であった横井小楠（明治２（1869）年１月５日、京都御所近くで暗殺された）の墓があるなど、熊本ゆかりの寺であった。

小楠の子横井時雄は、同志社英学校の第１回卒業生（明治12（1879）年６月卒業）15名の中の一人で、明治16（1883）年から同志社社員（現在の理事）に任用され、さらに明治19（1886）年からは神学科教授を兼ねて新島を助けており、彼の仲間には金森通倫（同志社英学校校長心得）をはじめ新島の信任あつかった人たちが多数いた。その熊本バンドの人たちの斡旋もあったと考えられるが、民治の埋葬に関する天授庵との交渉は、主として中村栄助が当ったようである（中村宛明治20（1887）年２月６日付新島書簡）。父が埋葬されているのだから、明治23（1890）年１月23日に永眠した新島襄についても、天授庵墓地に埋葬すべきものと、だれしも考えたろう。新島の葬儀通知や埋葬許可願には、南禅寺墓地に埋葬すると書かれている。

彼等は世より取らんとす
我等は世に与えんと欲す

葬列に加わった人々の手には、何本もの幟がありました。徳富蘇峰が勝海舟に依頼した墨書「彼等は世より取らんとす我等は世に与えんと欲す（写真）」や「自由教育 自治教会 両者併行 邦家萬歳」など、真冬の空にはためいた言葉は、時を超えて今も同志社に脈々と受け継がれています。

ところが葬儀の前日（同年１月26日）になって、南禅寺から、葬儀は一切キリスト教の式によらないこと、キリスト教徒であったという碑は建てないことなど三つの条件が、同志社へ通告された。

現在でも仏教の寺院では、宗派によって葬儀の行ない方や供養の仕方が異なっており、他宗派の人に墓地を提供することはあまりない。キリスト教徒ともなれば問題外であろう。にもかかわらず、キリスト教徒であった新島の姉美代（明治12（1879）年10月23日永眠）や、同志社教員であった山崎為徳（同14（1881）年11月９日永眠―同志社英学校第１回卒業生・熊本洋学校出身）の墓地を、東山の黒谷山内にもとめえたのは、黒谷の寺院が、幕府から京都の守護を命じられた会津藩の宿陣になったことがあり、藩士の墓地もここにあることから、元会津藩士であった山本覚馬や、その妹八重（明治９（1876）年１月３日、新島襄と京都ではじめてのキリスト教の式により結婚）らが頼みこんだからであったと思われる。南禅寺については先にみた。当時の日本の社会では、キリスト教徒の墓地は、全国的にどこにおいてもえがたかったのである。

『国民新聞』が報じた新島の葬儀記事
（1890年2月4日）

新島襄はキリスト教界の指導者の一人であったし、同志社や京都市内に限らず、彼によって導かれ、また彼を敬慕するキリスト教徒は全国的なひろがりをもっていた。南禅寺ではそうした新島に墓地を提供したあとに予想される問題を憂慮したのだろう。だが、同志社としてはもちろん、八重ら遺族にとっても、当然のことながら、南禅寺から通告された埋葬条件をのむわけにはいかなかった。そこで急遽、京都市の共葬墓地になっていた若王子へ変更せざるをえなかったのである。そこは墓地とは名のみで、潅木が生い茂ったさびしい小山にすぎなかった。

明治23（1890）年１月27日午後１時から、チャペルの前に大テントを張って新島の葬儀は営まれた。参列者は4,000名ちかい数にのぼった。柩は同志社生徒にかわるがわるかつがれて、氷雨のなかを寺町通りを南下して（河原町通りはまだ整備されていなかった）三条通りを東にむかい、南禅寺から若王子神社まで北上して若王子山頂へ達した。埋葬を終えたのは、冬の日がとっくに暮れた午後６時であった。墓には板塀をめぐらし、観音開きの格子戸がつけられた。そうすることによって幾らかでも墓地らしくする必要があってのことでもあろう。新島が生前敬愛していた勝海舟の筆になる碑銘を、自然のままの鞍馬石に刻んだ墓碑ができたのは、葬儀の翌年1月であった。

新島の死後、視力を完全に失っていた上に病弱であった山本覚馬がその代理をつとめたが、明治25（1892）年３月に、同志社第１回の卒業生小崎弘道（熊本バンドの一員）が社長に就任して安堵したかのように、その年の12月28日に世を去った。65歳であった。宣教師Ｄ・Ｃ・グリーンによって、明治18（1885）年５月に洗礼をうけていた山本は、新島の墓のほとりに葬られたのである。

捧げる祈り

同志社の寮生たちが中心になって、創立記念日や新島永眠の日に、墓前で夜明け前に祈祷会が行われるようになったのは、おそらく明治30（1897）年前後からであろうが、それが慣行化されるのは30年代以降のようである。もともと寮生たちの自発的なものであったその祈祷会は、第2次大戦後は学校の行事として引き継がれて現在に至っている。

新島と山本が埋葬されてのち、若王子の共葬墓地にはキリスト教徒の墓がふえていった。無名にひとしかった小山の存在が、東山36峰の１峰として知られるにいたったのは、キリスト教徒の墓地の存在によってである。

祈りの日

5月	同志社共葬墓地納骨式
11月29日	同志社創立記念日祈祷会
1月23日	創立者永眠の日祈祷会

至高の地

同志社の交渉が実って、京都市から新島・山本両家の墓地として、共葬墓地のうち148坪（588.4㎡）の使用許可書が新島八重に交付されたのは、明治43（1910）年２月であった。両家の近親者にかぎらず、同志社ゆかりの人たちもここへ葬られるようになったのは、それ以後のことである。

同志社英学校の設立に参画し、明治期の同志社の大きな支えとなったJ・D・デイヴィス（明治43（1910）年11月４日永眠）もここに埋葬されている。彼は旅行中米国のオベリン市で亡くなり、その地の墓地に葬られたのであったが、在米校友の懇請と斡旋によって、大正９（1920）年９月４日に若王子の同志社墓地へ分骨埋葬されるにいたったのである。それはデイヴィスの永遠の帰校であり、一人を欠いても同志社英学校は生まれなかったかもしれない三人新島襄、山本覚馬、そしてデイヴィスが、肩を寄せあうようにして同じ場所に眠ることになった。

88歳の長寿を全うして、新島八重が昭和７（1932）年６月14日に永眠したあと、嗣子に恵まれなかった新島夫妻のことばなき遺言として、同志社は墓守の責任を負うこと、荘厳なる記念墓域として永遠に保存することなど３項目の合意により、昭和９（1934）年11月に京都市から前記墓地の使用権・管理権の委

新島襄の墓 2代目

新島襄の墓 3代目

譲をうけた。そして昭和10（1935）年に、「校祖墓地ヲ聖地トシテ永遠ニ保存スルニ適スル如ク改メ」（「同志社常務理事会記録」）て今日に至っている。若王子の同志社墓地はたしかに、同志社にとっては「聖地」だといってよい。

なお、建立されて90余年を経た新島襄の墓碑は、徐々に風化が進んできていたが、昭和61（1986）年６月、不慮の事故により倒壊し、修復不能の状態になった。

そこで急遽再建することになり、石材には新島ゆかりの地のものをということで、米国ヴァーモント州ラットランド産の花崗岩が選ばれた。ラットランドは新島が学校設立資金の募金を訴えて、5,000ドルの寄付申込みをえたグレイス教会がある土地である。地質学に多大の興味をもっていた彼が、地質調査に歩いた可能性もある。石材の運送には、グレイス教会の援助がえられた。

再建された墓碑の除幕式は、昭和62（1987）年１月16日に行われた。碑銘は元の墓碑からそのまま写し刻まれ、碑の背面には、当時の松山義則総長が記された再建年月も刻まれている。

墓地に眠っているのは、新島襄夫妻をはじめ同志社に功労のあった多数の方々である。

一本の木から鞍馬石
そしてラットランドの石へ

「葬儀は質素に。墓標は一本の木に新島襄の墓とだけ書く」。新島襄は、臨終の際こう言い遺して逝ったと伝えられています。
彼の希望どおり、最初の墓標は、簡素な木製でした。１年後の1891年、徳富蘇峰によって、生前新島襄が尊敬していた勝海舟の手による碑文が刻まれた鞍馬石に取り替えられています。
しかし、1986年に事故で倒壊。修復が検討されましたが、90年の時を経て、風化が進み、すでに困難であったことから再建することに決定しました。現在の墓は、３代目のものです。新島襄の訴えにより多額の献金が捧げられたアメリカン・ボードの年会開催地ラットランドの石、そして２代目と同じく勝海舟の揮毫に基づいています。

※配置図の墓石の氏名は刻印に基づいて記載

埋葬者

※戸籍上の名称を記載（不明な場合は墓石の刻印に基づいて記載）

1　新島襄（1843.2.12-1890.1.23）
上州安中藩士・新島民治の第５子、長男として安中藩江戸屋敷で誕生。21歳のとき、鎖国中の日本を脱出し、渡米。フィリップス・アカデミー、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校に学ぶ。1874年末に帰国。翌年、山本覺馬、J.D.Davis らと共に同志社を設立。1889年末に病に倒れ、１月神奈川県大磯町で永眠。

2　新島八重（1845.11.3-1932.6.14）
会津藩出身。山本覺馬の妹。新島襄夫人。1876年、アメリカン・ボード（新島を支援したミッション）派遣の宣教師 A.J.Starkweather が開いた女子塾（同志社分校女紅場）を支援し、同志社女子部の基礎をつくる。

3　新島家　新島民治（1807-1887）
新島襄の父。号・是水。上州安中藩の祐筆として藩主板倉侯に仕えた。
新島登美（1807-1896）
新島民治の妻で、民治との間に２男４女があり、襄はその第５子で、長男。
新島美代（1838-1879）
新島襄の第３姉。
新島公義（1860-1924）
新島家の養子となり、新島襄の弟雙六没後、新島家を継いだ。同志社卒業後は伝道や同志社（職員）、実業界で活躍した。

4　速水家　速水時子（1840-1905）
新島襄の第４姉。新潟県の速水忠雄に嫁いだ。その孫の静江（1886-1977）は、秋保（結婚後速水）藤助（1881-1945）と結婚。藤助は同志社に学んだ後、同志社大学予科長を務めた。

5　廣津常五郎（-1901）
同志社校長心得を務めた廣津友信（1865-1937）の実父（養子縁組により叔父となる）。友信は、新島襄の死後、八重が養子にした、はつと結婚した。

6　松山家　松山高吉（1846-1935）
国学者。新島襄と親交があり、同志社神学校教授、理事を歴任。聖書の翻訳、讃美歌編纂にも功績があった。讃美歌を作詞。
妻の松山経子（1859-1929）と娘の松山初子（1893-1983）の墓に囲まれて眠っている。

7　外国人宣教師（教員）共葬墓
埋葬者氏名は刻印されている。主な埋葬者は次の通りである。
Mary F.Denton（1857-1947）
同志社の女子教育に家政学教師として尽力。彼女を通じて、栄光館、ジェームズ館等の建築費が寄付され、彼女の功績をたたえてパイプオルガンが贈られた。出町幼稚園（のちの同志社幼稚園）の初代園長。
Alice E.Gwinn（1896-1969）
女子部で 8 年、中学校で22年、英語教師を務める。宗教教育にも熱心であった。
Robert H.Grant（1911-1974）
アメリカン・ボード宣教師として、第二次大戦後に来日。大学文学部教授。女子部の教育にも功績を残した。
Gwilym G.Lloyd（1914-1984）
アメリカの合同長老派教会の宣教師。大学神学部で新約神学やギリシャ語原典を担当。
John G.Young（1902-1990）
アメリカン・ボード宣教師として、第二次大戦後に来日。大学神学部や商業高等学校で教え、ハワイ寮舎監を務めた。
Esther L.Hibbard（1903-1999）
伝道師・宣教師として女子部での教育に大きな功績を残す。戦後に発足した同志社女子大学の初代学長。
John M. Rasche（1931-2011）
宣教師として来日。ハワイ寮寮監、中学校嘱託講師、大学神学部嘱託講師、中学校教諭を歴任。

8　Daniel C.Greene（1843-1913）
アメリカン・ボードが日本に派遣した最初の宣教師。摂津第一公会（現神戸教会）を設立し、初代牧師を務める。横浜で聖書翻訳に従事した後、同志社で神学や旧約聖書学を担当。在職中、彰栄館、同志社礼拝堂、有終館を設計、監督した。

9　Mary J.Greene（1845-1910）
Daniel C.Greene 夫人。マウント・ホリヨーク・セミナリーを卒業後、1869年に結婚。神戸、京都、東京などで働いた。

10　山﨑為徳（1857-1881）
熊本洋学校、開成学校（東京大学の前身）を経て、同志社に入学。第 1 回卒業生であり、最初の日本人教師・幹事の一人として草創期の同志社に貢献。碑文は、M. L.Gordon 教授の撰文。著書『天地大原因論』は、その英才をしのばせるもので、J.D.Davis 教授が英文の序を寄せている。

11　水﨑基一（1871-1937）
同志社大学教授、理事、女学校校長を歴任。大学設立（専門学校令による）に際し、新島の遺訓を守って徳富蘇峰らと募金活動に献身した。碑銘は、蘇峰によるもの。

12　堀貞一（1863-1943）
同志社卒業後、自給主義を標榜し、滋賀、新潟、群馬等で伝道、後にハワイで日本人教会を牧した。海老名弾正総長に請われて、同志社宗教主任となり、学生生徒に多大な感化を与えた。

13　Dwight W.Learned（1848-1943）
アメリカン・ボード宣教師であり、同志社大学の初代学長。同志社英学校開校直後から52年間、教育に貢献。特に神学・経済学・政治学に関する著書が多く、近代日本の学術の発展に大きく貢献した。碑文の“Learn to Live and Live to Learn”は、彼の愛誦句である。

14　徳富猪一郎（1863-1957）
号は、蘇峰。民友社を創設し、『国民之友』『国民新聞』を刊行し、明治の青年や知識層に強い影響を与えた。新島襄の遺志を継いで同志社大学の設立に尽力し、終生助力を惜しまなかった。主要著書に『近世日本国民史』全100巻がある。碑銘は自筆。

15　山本覺馬（1828-1892）
同志社発起人の一人。現在の今出川校地は、彼の所有地であったと伝えられている。「同志社」の名は山本の発案という。もと会津藩士、京都府顧問、初代府会議長。

16　山本家　山本権八（-1868）・佐久（1810-1896）・三郎（-1868）
山本覺馬、八重の両親。 3 男、三郎も埋葬。権八、三郎は戊辰戦争で戦死した。

※配置図の墓石の氏名は刻印に基づいて記載

17　山本久榮（1871-1893）
山本覺馬の娘。同志社女学校、神戸英和女学校（現神戸女学院）で学んだ。徳冨蘆花の小説『黒い眼と茶色の目』に描かれた「茶色の目」事件のヒロイン。

18　原田家　原田助（1863-1940）
第７代同志社総長。在任中に大学、女学校専門学部（いずれも専門学校令による）を設立し、同志社の学術レベルの向上に貢献した。神戸教会牧師、日本組合教会会長。

19　森田久萬人（1858-1899）
同志社第１回卒業生で、最初の日本人教師の一人。同志社の財政・教育の充実のために貢献。理論的な思考に優れ、非常な読書家であった。妻の森田始子（-1931）と長男の森田敬（-1899）と共に眠っている。

20　不破家　不破唯次郎（1857-1919）
唯次郎は同志社を卒業後、福岡、前橋、京都で教育と伝道に従事。

21　宇野家　宇野重喜（1853-1919）
同志社体操教師であり、総寮長。京都YMCAや日本体育会の設立にも尽力した。日本最初のキリスト者陸軍軍人であり、墓石は墓地の「衛兵」の位置にある。

22　松本五平（1831-1899）
本名宗之。同志社初期の用務員で、新島を尊敬し、永遠に新島の許にいたいと希望して洗礼を受け、また、死後も新島の「墓守」でありたいと願った。ユーモアに富む伝説的な人物で、新島は彼を「五平さん」と敬称をもって呼んでいたという話は有名。

23　髙木庄太郎（1889-1927）
同志社大学卒業後、同志社大学教授となり政治学を教えた。「手腕は人格の裏書を要す」がモットー。墓碑銘は賀川豊彦の書。台石のラテン語 TOTUS IN SEPSO（独立自助の人）は、D.W.Learned の撰文で、髙木の遺志によって刻まれた。

24　大西留吉（1883-1909）
同志社普通学校在学中に日野真澄から洗礼を受ける。苦学のため在学中に肺結核で死去。

25　同志社共葬墓
同志社関係者の希望に応えて、1973年に設けられた。現在250名余の埋葬者氏名が刻印されている。主な埋葬者は次の通りである。
秦孝治郎（1890-1972）同志社理事長。
大塚節治（1887-1977）第13代同志社総長、同志社大学長。
住谷悦治（1895-1987）第14代同志社総長。
上野直蔵（1900-1984）第15代同志社総長・理事長。同志社大学長。
齋藤亥三雄（1905-1996）同志社理事長。
松山義則（1923-2014）第16代同志社総長、同志社理事長、同志社大学長。

26　永田伸也（1896-1921）
同志社大学法学部卒業後、同学部助手・講師となるが、25歳の若さで夭折した。

27　米田和男（生没年不詳）
同志社政法学校や京都帝国大学の教授であった米田庄太郎の長男。

28　茂木平三郎（1850-1902）
同志社英学校卒業後、上州、越後、日向、京都で伝道に従事。妻千代子と共に眠っている。
茂木一郎（生没年不明）
茂木夫妻の長男。

29　梶谷仲（生没年不詳）
夫が出奔したために生活に困窮した。遠縁の黒住猪太郎（同志社卒業生）から聞いた新島襄を頼り、子供と共に京都に転住した。

30　湯浅恒子・光吉・直代
恒子（1866-1896）は、上州安中出身。同志社女学校を中退。同志社の経営に尽力した湯浅吉郎（半月）夫人。同志社病院で死去。光吉（長男）、直代は湯浅吉郎の子供。

31　大澤徳太郎（1876-1942）
同志社に学び、後に実業家として24年間同志社理事を務めた。在任中、大学令による大学への昇格、岩倉の土地購入などに顕著な功績があった。貴族院議員。父善助も、新島の在世中から社員（理事）として、また、長男善夫も長年理事として同志社に尽くした。

32　中村栄助（1849-1938）
同志社社員（理事）。新島の信任が極めて篤く、草創期の同志社に絶大な貢献をした。新島の永眠後は、同志社の危機に際し、いくたびか臨時社長、総長代理となって難局を切り抜けた。国会議員、府会議員、初代市議会議長を歴任。碑銘は、蘇峰による。

33　Jerome D. Davis（1838-1910）
アメリカン・ボード宣教師。神戸から京都に転じ新島の同志社設立計画に賛同し、山本覺馬と共に終生新島の良き理解者として、彼を助けた。神学書の他、新島伝も著す。
“My Life is My Message”が遺言。

同志社墓地
左京区鹿ケ谷若王子山町
タクシーの場合　若王子神社で下車　徒歩25分（山道）

■道しるべ

発行　学校法人　同志社　法人事務部　〒602-8580 京都市上京区今出川烏丸東入　TEL 075-251-3006

表紙写真／新島の遺品、針金フレーム付の色めがねと鉄製のケース